

JACTFL 第9回シンポジウム「外国語教育の未来を開く」  
分科会報告：  
「世界とつながる複数外国語教育の展望を実現する多様な実践報告」  
—分科会報告 1: オンライン授業の実践について—

郷司 雅子 GOSHI Masako<sup>1</sup>

新型コロナウイルス感染症拡大の影響は教育界にも変化や工夫をもたらし、様々な取り組みにつながった。分科会 1 では、その前向きな事例として、国内外で取組まれたオンライン授業の実践について、5本の発表が行われた。以下に、それぞれの発表の骨子を報告する。

1. 「ハイフレックス型国際協同学習のデザインと学習成果 —アイヌ文化の展示解説を事例として—」

発表者：杉江 聡子（札幌国際大学）

ハイフレックス型（HyFlex: Hybrid+Flexible）の授業を行った実践報告である。最適なデザインを探究し、「観光+地域理解+国際協同学習」のオンライン化について工夫を行った。

授業は日本人学生と留学生を対象にし、大学博物館を利用した多言語ガイドのコンテンツ作り（解説文と多言語資料作成）に取り組みさせた。プレゼンテーションスライドの共同制作を含む活動をグループで行わせ、日本語で発表させた。留学生が積極的・主体的に参加したグループほど、また、PCリテラシーが高いほど、発表の評価が高かった。日本人学生はスマートフォンしかなく留学生と対等に協同できず、結果として作業負担に不公平感が生じた。

参加者は、スキル不足や言語コミュニケーション能力不足等による協同学習の難しさを感じた一方で、コミュニケーションや言語表現などの面で学習成果があり、国際協同学習環境での学びをさらに深めたいという意欲が形成された。課題として、対面と遠隔を同期的に行う場合の学習支援の難しさや、渡日前留学生・地域特有の環境依存問題がある。

---

<sup>1</sup> 所属：埼玉県教育局 Saitama Prefectural Board of Education

質疑応答:

- ・留学生は、日本語で質問をすることとしているので質問しづらいのか。
- 英語、中国語、日本語で対応しており、言語能力が理由とは考えていない。機械翻訳の使用も許可している。

## 2. 「多様なスペイン語話者・学習者と繋がる活動 —留学希望学生のためのオンライン講座での試み—」

発表者: 寺尾 美登里 (立命館大学)

平井 素子 (立命館大学)

アンドレス・ペレス・リオボ (同志社大学)

スペイン語圏への留学希望者用に開講された課外オンライン講座での取り組みに関する報告である。講座は全 9 コマで、設定した 3 つのテーマ(自己紹介・写真描写・大学紹介)を 3 コマ(モデル提示・実践・発信)で進めた。発信はスペイン語で行うこととし、そのプラットフォームとして Slack を採用した。自分で書いた文章を画像とともに Slack に投稿し、受講者や教員のみならず、スペイン在住スペイン語母語話者が質問やコメントをしてくれ、実践的なやり取りができ、また、他の人が書いたものを読み、質問やコメントを入れる活動も実施した。

アンケート結果では受講者の満足度は高く、スペイン語学習に役に立ったという回答が多かったが、知らない人とのやり取りに抵抗があり、あまり積極的でない学生もいた。投稿するかしないかは自由としたうえで「つながる体験」を設定したのだが、改善策として、Zoom 交流会などで事前に顔を合わせた後にやり取りを始めると良いと考える。「留学的」な雰囲気を経験することは重要であり、そのためにはネイティブや留学生の参加を増やすことも課題である。本講座で実践した活動が参考になれば幸いである。

質疑応答:

- ・スペインとの時差の問題はどのようにクリアしたか。
- 時差を考え、本課外講座を 5 限・6 限に設定し、時差の問題をクリアした。スペイン時間の午前 11 時くらいのタイミングで入ってもらった。

- ・Slack に参加した学生と参加しなかった学生では何か差はあったか。  
一積極的に投稿した学生もいれば、元々 SNS 参加に抵抗のある学生がいた。Slack は絶対参加とはせず、交流の場の 1 つとして提供した。
- ・スペインとのオンラインの交流などは考えていないのか。  
一スペインとの交流にぜひつながりたいと考えている。

### 3. 「ドイツ語オンライン授業—大学教員の悪戦苦闘—1 年間を振り返って」

発表者：神谷 善弘(大阪学院大学)

前期「ドイツ語入門Ⅰ」と後期「ドイツ語入門Ⅱ」におけるオンデマンド型授業＋対面授業の報告に加え、授業評価の結果も踏まえて 1 年間を振り返り、次年度以降への展望を考える。

学生がドイツ語発音に慣れ親しむことから始め、YouTube によるオンデマンド型授業を運営した。教育支援システム OGU-Caddie を利用し、授業動画を限定公開し、発音・語彙・文法等の説明、練習問題の解答の提示、小テストを行った。「平時に戻るまでの遠隔授業」に対し「無理はしない」ことを心がけ、動画作成時には①ゆっくりははっきりと話す、②アクションも取り入れる、③発音練習では間が大切、④10 分程度で終える、⑤長くても 15 分未満という 5 点に留意した。授業評価は、「授業に満足している」「授業の内容に興味を持っている」「知識や能力を得ることができた」「担当者は熱意をもって授業にのぞんでいた」「担当者は、学生の理解度を確認しながら授業を進めた」等の項目に関して、概ね好評であった。

YouTube の授業動画は合計 110 本作成した。このうちの 2 本を実際にご覧いただく。原作、脚本、監督、主演、編集等の全てを一人でこなすのは大変であったが、授業評価や学生の感想から鑑みると、ある程度の教育効果があったと自負している。作成した YouTube 授業動画は、今後の授業の予習や復習に役立てることもできるし、欠席者に視聴してもらうことも可能である。場合によっては、発展的な学習に関する新たな授業動画の作成に挑戦することも考えられるかもしれない。

質疑応答：

- ・1 つの授業動画の作成にはどのくらい時間を要したか。

—10分～15分の動画を作成するのに、初期のころは1時間かかっていたが、慣れてくればもっと短い時間でできた。

#### 4. 「Flipgrid を活用した日露オンライン相互学習の試み」

発表者：北岡 千夏(関西大学)

東 康太(極東連邦大学)

最初に、ビデオコミュニケーションサービス「Flipgrid」を用いた実際のやり取りをご覧いただく。本発表ではこのサービスを活用した実践報告とその結果の検証を行う。

Flipgrid は制限されたグループ内で動画に動画で返信しコミュニケーションを積み重ねていくのが特徴で、学習言語の母語話者から生きたフィードバックが得られることが最大の魅力である。教師からのフィードバックができるようコメント欄があり、評価のためのルーブリックも備わっている。対面授業とオンライン授業のどちらでも活用可能で、時差を考慮しなくてもよく、学生は準備する時間を設けられるため既習事項を押さえた表現を心掛けることが可能である。さらに、フィードバックがしやすく、返事が来ることがモチベーションの維持につながる。

学生は、自己紹介、大学紹介、今年の漢字などのトピックに対し学習言語または母語で投稿した。加えて、会議通話ツール「Remo」を活用し、リアルタイムで会う機会を設けた。「相手がいる」ことを意識し、興味を持って参加し交流を深め、単なる文法練習ではなく自分の言葉が相手に伝わったと実感した。また、コメントで使われる表現がそのまま授業素材となり、学んだ表現をすぐに実践的に使うことができた。授業目標を設定し評価を行ったが、教員は運営管理、投稿状況の確認(評価対象)、翻訳や補足説明を行った。学生には、自分の母語が相手の学習言語であることと、自分のビデオが相手には良質な教材であることを意識させたい。

学習言語の母語話者へのアクセスが容易になり、現地の生活の様子などもシェアできることで、学習者が生きたコミュニケーションを実感でき、学習促進につながられる。カウンターパートをどのように見つけ出すかが課題ではあるが、さまざまな教育現場での工夫を一過性に終わらせることなく、今後も活用・発展させていきたい。

質疑応答：

・SNS 参加に抵抗を感じる学生に対してはどのように対応したか。

—最後まで投稿しなかった学生はいたが、強制はしなかった。国際交流としての意義を伝え、日本語で返事することや顔写真にスタンプを入れることで参加するよう促した。極東連邦大学では評価に入れたため、投稿しない学生には代替の筆記課題を課した。

・Remo について、教室で携帯電話を活用して行うことは可能か。

—可能だと思う。ただし、無料版には制限があり、有料版はかなり費用がかかる。

## 5. 「Google フォームと Zoom を用いた日仏学生交流の試み」

発表者：西部 由里子(慶應義塾大学)

根来 良江(ラ・トゥール中学高等学校、パリ政治学院)

後藤 由美(ESCE ビジネススクール、フランス国立東洋言語文化学院)

日本とフランスの学生をつなぎ、互いの国を身近に感じる契機を作りたいと考え交流活動を行った。「異文化交流」を重視し、誰でも簡単に参加できる企画(アンケート交換)と、学習意欲が高い学生のための企画(Zoom 交流会)の二段構えとした。

アンケート交換では、質問したい項目を母語または学習言語で考えさせ、完成したアンケート(日仏 2 か国語で併記)を交流相手の学生に Google フォームで実施した。回答結果を振り返ったところ、コロナ禍の学生生活や現在の流行を知ることができたなどと、同世代の学生の回答に興味津々で自国を振り返る契機となった。教師にとってはアンケート回答結果が貴重な情報源となった。2 回目のアンケート交換ができれば、さらに深いやりとりができたと考える。

希望参加のオンライン交流会は、土日の 1 時間ほどで実施した。第 1 回目は、自己紹介を含めたミニスピーチを学習言語と母語の両方で行い、続けて小グループに分かれ最初の 5 分は日本語のみで、次の 5 分はフランス語のみで会話をした。第 2 回目は、行事や食べ物など自国に関する話題でミニスピーチを行った。連絡先を交換する学生もおり、満足度は高かった。コミュニケーションができた喜び、相手への尊敬の気持ち、勉強意欲の高まりがみられた。

コミュニケーションをとりたいという気持ちが語学学習のモチベーションにつながり、こんな時だからこそできた交流を非常に肯定的に受け止めてくれた。インターネットや SNS を使い慣れている学生たちが、画面越しとはいえ 1 対 1 で交流できたことで、互

いの国が身近でリアルなものと感じられた。人数・日程調整など課題はあったが、他の教員や来年の学生と共有し活動を広げ、交流を深めたい。また、Padlet を使った写真交流を含め、教科書を離れた気楽な交流活動や同世代とリアルタイムでつながることの意義を踏まえ、新たな可能性を考えたい。